

2011 年東日本大震災・調査視察報告集

その2

様々な思いで被災地を訪ねた者たちによる

同人誌的報告集

2011年7月20日

## はじめに

「2011 年東日本大震災・調査視察報告集 その2」をお届けします。

その1は、この報告集を出すに至った経緯を「はじめに」に記し、宮城の津波被害をテーマに、視察報告3編でまとめました。

その1を、大変恣意的ではありましたが、メールアドレスのわかっている様々な方々に送信したり、関東学院大学の学生礼拝で「津波被害地での出来事」という題で、話す機会をいただいたときに資料として配付したり、さらに身近な人に差し上げたりしました。

その1に対して、「被災写真がとても参考になった」、「メディアでは伝わらないことを知ることが出来た」など、報告集に対する評価をいただきました。

いくつかの丁寧なコメントの一つが、井上圭典氏のメールでした。次のような書き出しでの長文のメールでした。

「大変貴重な資料を送信頂きありがとうございました。  
大地震、大津波、原発過酷事故が重なり、以来私の心は晴れないままです。鬱の状態というのでしょうか。  
福澤諭吉が「一生に二時代を生きた」という趣旨のことばを残しておりますが、それをもじるなら私は「一生に三時代を生きた」ことになります。」

私は、その真摯なメールを読みまして、このささやかな報告集に、投稿をお願いいたしました。それが本稿「3月11日以降---孫世代に語り継ぎたい戦後体験記」です。

かなりの分量ですので、その1と同じ程度のページ数にするには、他の報告を加えるのは困難と判断し、井上氏の原稿1編で第2号とすることになりました。

編集方針にあわなければ「没でもかまいません」と付記しておくっていただきました。この報告集は、最終責任は、筆者が負うことにしました同人誌ですので、様々な視点での報告や意見を投稿いただく場ととらえております。したがって、これほど真摯な文章を没になど出来ないし、するつもりはありませんでした。

井上圭典氏は、筆者が所属する日本長老教会の府中西原キリスト教会の創設会員であり、また、長く「靖国神社国営化反対・キリスト者の集い」の中心メンバーの一人として、運動に関わってこられました。最近足が遠のいていましたが、筆者も、その運動の末端に加えさせていただいております、長い交わりがありました。

井上氏は、本文の中にもありますが、海上保安庁水路部航法測地課で天体暦・航海暦の計算を担当してこられた天文計算のエキスパートでもあります。

お読みいただければ幸いです。

(文責・楢木紀男)  
nabekinorio@yahoo.co.jp

## 3月11日以降

## 孫世代に語り継ぎたい戦後体験記

井上圭典

## ● 3月11日の体験

2011年3月11日午後2時半過ぎに大きな地震を体験した。近所の自治会館2階で老人達と囲碁を打っている最中であつた。テーブル上に折りたたみ碁盤をおき、椅子に腰掛けてのゲームスタイルであつた。碁盤が揺れ、板上の白黒の碁石も散乱し始めた。碁盤のズレは手で押さえることができたが、碁石は盤上に散乱し始めている。テーブル自体も揺れている。対局続行は不可能になった。いつもより揺れが大きく長い時間の地震であることを体感したが危機感よりも折角の対局が台無しになった落胆の方が大きかったように記憶している。囲碁は対戦相手と一緒に白黒の石によって盤上に描き出される共同の「芸術作品」である。それは棋力の強弱、技芸の高低には関わらない。揺れが執拗に長いので老人囲碁会のマネージメント役の私は、揺れている最中であるが階下に降り玄関の扉を開けた。閉じ込められては大変と地震直後対処法の一つを実行した。対局部屋に戻ると、石を並べ直すか、打ち直すかなど仲間同士が相談していたので進行は序盤、中盤、終盤まちまちである。ともかく中止の意志はないらしい。その相談は痛いほどよくわかる。「碁打ちは親の死に目に会えない」のである。私は、役目上、心を鬼にして、囲碁会中止を決断し、各自の家の状態、家族の安否をただす必要があると提案し、全員が合意し道具を片付け各自帰宅した。

自宅には書棚が3部屋に置いてあつたが、東西方向に並べてある上部の書籍が床に散乱していた。家の揺れの方向が大部分南北方向であることが判った。南北方向に並べてあつた書籍は落ちずにそのまま収まっていたのである。FDラック（FDがまだ保存され、時たま使っている!!）、CDラックがいずれも転倒し中味が散乱していた。PCの外付けスピーカーが机上から落下していた。（それに気づいたのは1、2週間後であつた。PCから出る音が小さくなったのでボリュームを最大にする。それでも小さい。机の下の隅で横転していたスピーカが鳴っていたのである。）

家内は10日から自治会主催の伊豆方面の一泊旅行をしており、地震時には新装なった羽田空港を見学中であつた。激しい揺れに襲われ、天井の高いロービー広場の太い柱にしがみついていたそうである。旅行仲間の一老婦人は「もういい、もういい」と呻いていたという。揺れが長いとこのような発声となるのであろうか。敢えて書き留めておく。道路

渋滞を予想したバスの運転手の機転で予定コースを外した道路を通り、夜10時頃に帰ってきた。帰宅難民を免れた。

家にはペット犬が独り留守していた。さぞかし驚いたことであろう。斜隣のご婦人が心配して部屋を見に来てくれたようである。このご婦人には常時私達老夫妻の家の鍵を預けていたのである。

テレビに流れる津波の惨状に、息を呑んで見続けた。言葉を失った。何でこのようなことが起こらねばならないのか。一体全体何なのかこれは。ひどすぎる程の仕打ちを受けている人達は何の落ち度があると言うのだ。あまりにも理不尽な出来事ではないか。日本国が何か悪いことをしてかし、津波で折檻されているような気がした。

国土がむち打たれているが、自分の身がむち打たれているようで苦痛であつた。祖国愛というか、祖国への憐憫というか、心がぐらぐらと煮えたぎった。そして記憶の奥底にしまいこまれたたていたものが、一挙に噴出した。潜在していたものが一挙に顕在化したのである。記憶の深い層の扉は、外部からの強烈な刺激がないと開けることができないことを知った。忘れられていたが、強い印象を受けたものが次々と思い出されたのであつた。

## ● 3月11日以後、「一生に三時代を生きる」

大地震後、12月8日（対米英への宣戦布告の日、1941年）の前後、8月15日（終戦の詔書発布の日、1945年）の前後の日々を想起した。日本の運命を決めた歴史上画期の日のある期間に相当する。3月11日もそれに相当する画期となる日であることを直感した。これまで国内外の大災害、戦災を被った人々の避難生活場面をテレビで何回も見てきたことか。そのたびに大変心を痛め、天災・人災について考えたものである。にもかかわらず自分自身を含めた一家が戦災によって小学校講堂に避難生活を余儀なくされたことを強く連想しなかつた。ところが今回の大地震によって生じた夥しい数の避難生活場面を目にして、自分の避難生活を鮮明にそれも持続的に思い起こした。「遠い昔の出来事を、それがまるで昨日の出来事のように思い出される」という常套句はよく耳にし、瞬間的には私もそのような経験をしてきた。映画の手法で回想シーンが次から次へと写し出されるように。しかし、今回はそれが瞬時にではなく、何かに付け戦前、戦後の時期の細々とした場面が鮮明に思い起こされてくるのである。回想シーンの一画面でびたりと止まり、しばらくして次の場面に移ると言うような、各場面毎に感慨をもって想起したのである。直近の出来事より先に遠い昔の出来事が思い出されるという頭の状態は異常であるが、それがしばらく続いたのである。3月11日は私個人の転機であるとともに日本の転機であるとの直感「個人体験」からきたものであろうが多分正しいと思う。福澤諭吉は「一身

にして二生を経る」と言った。現代語に翻訳すると「一生涯に二時代を生きる」経験をしたというのであろう。私は「一生涯に三時代を生きた」ことになる。戦前、戦後、そして3月11日以降の三時代を。

鶴見俊輔は、「人が生きてゆく上で非常にむずかしい問題に出会って、それをある仕方でも解くというような時には、その基礎になるのは『体験』なんです」と語っている。私はこれまで様々な経験をし、洪水のような情報と付き合ってきたが、印象に残る経験とか情報の取捨選択の基準になるのは、私自身のなかの奥深く眠っている「体験」であったことを、3月11日で確認することになった。

3月11日の体験とその後を考え、感じ、実行したことなどを以下随筆風に残しておく。

### ●実現不可能な願望

大災害直後に戦前・戦後の世相を思い出した後、避難所暮らしの場面をテレビで見ている、自分が「手の職」をもっていたら良かったのにと大変悔やんだ。理容師、あんま師、自動車運転手、建築士、弁護士、医師など、そのどれも資格をとることができなかったかもしれないが、ともかく素手で被災地に行けたらという願望であった。まさに老人の戯言になるが、そのような思いが暫時頭の中を駆け巡った。何か災害がある度に「国境なき医師団」の活躍のニュースを見聞する。その都度これこそ「正義の騎士団」と賞賛を惜しまなかった。しかしこのような救援の一員として参加したいとまでは思い及ばなかった。今回の大被害に際して、〇〇団員の一員として救援活動に加わりたと思ったのである。大被害に遭遇して異口同音に「私に何ができる、何をすべきか」との衝動に駆られた人々に同感する。ともかくじっとしてはられない、私にできることは何かの思いである。アスリートやエンターテイナー達が立ち上がった、しかも日本だけでなく世界からも。自分ができると、自分の影響力を自覚し自負しているからこそ募金活動、興業活動に乗り出したものであろう。実力世界で生き、のし上がってきた人は、自分でできることは何かなどと考える前に実行する。その決断力、実行力はさすがと思った。

韓国に元従軍慰安婦（軍の性的奴隷）問題に関わるグループがいて、定期的に日本大使館前で、糾弾行動をしている。3月11日以後、このグループは日を置かずに日本大使館の前で大災害に対する「見舞い」行動をしたと報道された。恩讐を超えて人間として、しなければならぬことをわかまえているのである。普通の人より悲惨な経験をした人ほど、悲惨な状態にある人の痛みを深く強く同情できるのであろう。

数日経過した後、私にできること、身の丈に合ったことは、体を動かすことは不可能であることを悟った。私は、戦後になって日本が何故戦争し、悲惨な結末になったか、その原因究明に「時間と金と知

力」の一部をかけてきた。全部ではなかったことを告白する。力の大部分は仕事にかけてきた仕事人間であった。3月11日以後は、現在、幸いにして食べるための仕事から解放されているので、何故原発事故が起きたのかの原因究明を中心に据えた生き方に転換することが、私のできることだと考えるようになった。戦後は何故敗戦となったかが宿題としてわたしの頭の隅にあり続け、私の行動を規制していた。3月11日以降、何故原発事故は起きたかが宿題として、頭から離れないのではないかとの予感がする。鹿を追っていた猟師が、熊を追う猟師に変身したようなものである。追う相手が違っても、獲物を狙う猟師としての衝動は変化していない。

### ●自粛は強制されるべきではない。ステレオタイプの枕言葉「哀悼・見舞い」。

3月11日以後、「こんなことしている場合でない」と自分自身に言い聞かせ、「する」か「しないか」の決断を自分ですることが真の自粛であろう。事実は自粛という名の、「他粛」「規制」が何日か続いた。昭和天皇が重態の期間の「自粛」という名の重苦しい社会状況を想起した。予定した計画・事業など、「これをしている場合か否かが」がチェックされ始めた。イエス・ノーが「ボス」の一存にかかっているのが気になった。確かに私の家でも、何か計画なか、これから計画しようとする場合、「これをしている場合か」と家内と相談し、（私の家は民主的!）「場合でないか否か」を検討している。ただし身に降りかかる災害・事故・病気に関しては「明日は我が身、人ごとではないとの一種の無常観」がそこに働いている。例えば旅行計画一つとっても、私は「そんな場合かよ」というと、家内は「これを中止すると、一生このチャンスが訪れずれないかもしれない」というようなことをいう。一家のうちでもこれである。複雑な人間集団のなかでの「自粛」論争の決着は、民主的な手続きによるか、ボスの一声よるかでなされたのであろう。

枕言葉としての「哀悼、見舞い文」が「今日は」の挨拶代わりになっている。インターネット、情報誌の広告、さらに国会の質問の前口上でも、紋切型の「亡くなられた方に哀悼の意、被災者に心からのお見舞い」が先頭にくる。一体これはいつまで続くのであろうか。私の家の敷地は都市計画道路によって7割方削られる。この道路計画に反対するグループのホームページに時々「訪問」する。このホームページのトップに、例の「哀悼・見舞い」の文字が見える。何か違和感を覚える。と同時にここまで枕言葉が浸透していたかと感心し苦笑した。これまで3回、東京都主宰の説明会で、質問時間をほぼ独占して道路建設反対をぶって、説明会でなすべきでない、質問ならざる意見の開陳に、参会者の矚目をかい、説明会自体を台無しにしてきたグループである。被災者に寄り添う優しい心根の人達が、どうして説

明会会場では、道路行政糾弾の鬼に変身するのだろうか。「哀悼・見舞い」文が実のない軽い挨拶文に過ぎないと考えれば苦笑するにも及ばないことであろうが。「哀悼・見舞い」は社会的マイノリティ視されないための「護符」の役をしているのかも知れない。

戦前の数学、物理の専門書の序文などにも「国威発揚」、「常在戦場」などに類する文字が散りばめられていたことを思い出す。漢和辞典の見開きに「撃ちてし止まむ」などと印刷されていた。これは古事記にある日本尊（ヤマトタケル）の戦闘歌の句である。戦時には、戦時に相応しい枕詞・挨拶が必要なのであったように、非常時には非常時の挨拶が必要なのであろう。平々凡々な平和な時が流れている場合には、天候の挨拶を交わしてすますのであろうが。

### ●同情と冷酷非情

津波が襲う状況と避難生活場の状況の映像がマスメディアとインターネットで世界中に流された。ショックは世界の国々の人々に与え、深い同情心が一斉にわき起こった。早速各国元首クラスから見舞い、激励、支援のメッセージが続々と届いた。国交のない北朝鮮からも通信という形で発表している。

だが、人心は一筋縄で縛れるものではない体験をした。3月16日、行きつけの格安理髪店へ自転車に乗ってゆく。外出ついでにホームセンターに寄る計画も立てていた。街に出て何か異様な雰囲気を感じた。いつもより人通りが多く、普段見かけないひとが何か慌ただしい様子で動いていた。途中のスーパーマーケットに沢山の買い物客が並び、歩道・自転車道兼用の道を走る私は徐行を余儀なくされた。何の特価売り出しなのかと思った。理髪店は京王線中河原駅付近である。理髪後、約2キロメートル離れたホームセンターまで走行中に何軒かのスーパーマーケットがあったが、そこでも買い物客が行列していた。何を買いに来ているのか見当が付かなかった。買い物済みの客のビニール袋はそれぞれ満杯であるが、半分透けて見える商品はまちまちなのである。かつてのトレットペーパー騒ぎのように一品に限られていないことは確かである。ホームセンターはいつもと変わった様子はなかった。帰宅後知ったのは、街中の光景は、日用品の買い占め騒動の「府中市版」なのであった。買い占め理由は、日用品が大量に被災地に回され、品不足になる、なりつつあるとの噂が広まったからであるとのことであった。実態は物流関係の混乱でスーパーに商品が届きにくかったので陳列品が先細りとなっていったことにあるらしい。あれもなくなった、これもなくなった、被災地に回したのではないかとの疑心暗鬼が生んだ騒動であった。被災地は一切を失ったが、とりわけ日用品の補給は焦眉の急である。回って当然、回すべきで私達は辛抱しようとの覚悟はできないものか。であるのに買い漁るとは、なんたるエゴか、

なんたる非情さか、避難民の首を間接的にくくることになりはしないか。戦後すぐ、隠退蔵物資の摘発運動が起こった。敗戦のどさくさに紛れ、軍の上層部が軍トラックをつかって軍事物資（食料、衣服類）を大量に自宅に運び込み隠し持っていたが、その摘発運動が実行されたのである。買い占めはそこまでいかぬとしても心情的にはその矮小版ではないか。

3月11日以降、毎時、NHKの短いニュースを聴いていた。とくに原発事故の成り行きが心配であったからである。タイマーでニュースが流れるようにセットしていた。その都度何となく違和感を覚えることがあった。痛ましい事件の報道のあとに、為替レート、株価の現況、天気予報が流されることである。この3セットの情報を聴いて、普段は何の違和感もなかった。どちらかと言えばニュースに関心があり、天気予報を参考にし、経済状況は無関心で為替レートには多少興味を持って聞いていた程度であった。3月11日以降は、この経済状況が耳障りとなったのである。ニュースを聴き、自分の保有する株を売るか、買い足すか、他社の株に買い換えるかと思案する人が、如何なる事件があっても存在しているという当たり前の事実気づいたのである。全く無視し無関係と思われる人々の存在が大きく私の前に立ち構えているではないか。頑張れ日本、東北を救おうと「奮起」した人々で日本は充満しているのかなと錯覚していたが、地震・津波・原発事故を株投機の判断材料として日々過ごしている人々が存在しているのである。「日本一心」などどんでもない標語ではないか、と言う違和感である。為替レート・株価の変動の数値のなかに、通常の投資によるものの外にギャンブル性の投機によるものが潜んでいることの嫌悪感もあった。他人の難儀を踏み台にして金儲けを考える非情さへの嫌悪感である。

### ●年金

私は年金生活者である。死亡し、行方不明者にも年金生活者は勿論いたであろう。死亡確認者は年金打ち切りとなろうが、行方不明者には相変わらず口座に年金が振り込まれるのであろうか。まったく余計なことを考えているが、今後どう対処するのであろうか。また死亡者の口座の預金はどうなるのであろうか。このようなことを考えることは非情・不謹慎のそしりを免れないであろうが、年金に頼って生活する者の視点からこのようなことが見えてきてしまう。二重ローンに苦しむ国民に対して真剣に政策が論じられているが、未曾有の災害に付随する様々な難問を抱え込むことになった。日本はまさに国難の時代に突入したことになる。平時から戦時ならず有事、難事の時代に突入したのである。日米開戦に突入した12月8日に比べられる。12月8日の結末は8月15日となったが、3月11日はどういう結末をもたらすのであろうか。戦後日本は悪性

インフレによって国民は塗炭の苦しみを味わった。これからどうなるのか。

年金額が減り、インフレが昂進すると年金生活者はひとたまりもないことであるが、それは覚悟の上である。増税にも反対しない。ただし大財閥の「埋蔵金」を吐き出して貰うことを前提にしての覚悟である。それでも不足するのであればとの前提・条件をつけたい。大財閥の財布が膨らんだままで、国民の財布から復興資金を調達することは止めて欲しい。大財閥の財布中味は、実は国民の財布と発展途上国の財布から巧妙にかすめとったものである。それをそのままにして、さらに国民の財布を狙うのは止めて欲しい。

### ●原発事故

原発導入の是非は高度な政治判断で始まり、国民の声の届かないままに踏み切られた経緯がある。米国スリーマイル島原発事故、旧ソ連のチェルノブイリ原発事故の度に国際・国内世論が沸き立ち、国によって原発推進か脱原発かの政治決断が割れてきた。日本政治の舞台では、次のような議論が展開されてきた。原発は人工的なものである、人工的なものには事故はつきものである、事故があるから人工的なものは止めるというなら、人工的な一切のものを止めねばならぬではないか。現実には人工のものはすべて稼働している。事故対策は事前に予測して対処法は整っているからである。原発も稼働してしかるべきではないか。無用な事故予測とその結果について議論を繰り返しているより、稼働させて無事故を実証すればよいと見切り発車したところがある。戦争か戦争回避かの議論が交わされる間に、主戦論が国策として選択されたのに似ている。

私達の世代は、安全神話が振りまかれる前に、原子力バラ色時代が振りまかれていた。都市全体に温水が行き渡る。動く歩道が至る所にできる。農作物の品種改良で増産可能。鉄骨・工作機類の強度検定。人体内をめぐる栄養素・薬物の追跡調査。月旅行・火星旅行が可能となる。原子力自動車・鉄道列車・飛行機が可能。台風の進路をコントロールできるとまで言い出している。最後の夢物語は台風のエネルギーに匹敵するエネルギーを獲得したとの意味で、口が滑ってしまったのであろうが、「鬼は外」的な発言で国際問題化する発言である。極めつきの結語は、これからは原子核融合によるエネルギー利用の話で結ばれていた。核分裂の場合は放射能が問題であるが核融合反応によるエネルギーは「死の灰」を出さないからもっと有利で、もっと安価なエネルギー源である。ただしこれは遠い未来に実現が期待されるもので、今はその夢を持って欲しいなどと解説していたのである。夢物語の中でさらに夢を語っていたのである。これらの言説は、解放した原子力エネルギーのコントロールが難事であることが判明するにつれて俄に廃れてしまった一過性の夢であ

った。今にして思えば、これらの夢は原子力のエネルギーと放射性物質の特性とを混同して描きだしたものであった。原子炉から取り出す放射性物質の利用と原子動力炉から取り出すエネルギーによる利用とを区別せずに議論していたのであった。現在生きている壮年層以下の人々はこのような夢物語を知らないと思うので、思い出すままに紹介しておく。その後「安全神話」の時代となるのである。神話時代の前に「虹の時代」があったのである。

私は、原発反対の立場ではあったが、プルトニウムが大量に作られてゆくから反対との単純な理由からであった。事故の心配より、プルトニウムの増産・蓄積が心配であった。現に日本は大量のプルトニウムを保有している。事故がもたらす重大な結果に関しての思慮が全く欠けていた。事故は懸念対象外でプルトニウム増大の恐怖が先立っていた。スリーマイル島事故、チェルノブイリ事故の重大事故は原発操業、実験段階の人為的な事故で、克服可能と安易に考えていた。推進派は、ソ連のように雑な扱いを日本の技術者はしないとまで言っていた。その後東海村の使用済核燃料処理で臨海事故が発生したが、原因はウラ・マニュアルに従って作業したもので、本マニュアルに従っていれば事故は防止できたと、システムの安全性に問題はなく、操作員の手抜きが事故原因であったとの最終報告書が出された。これらの事故を教訓として日本の原発の現在があるとの論説に丸め込まれていた。誠に愚かなことであった。福島第一原発の1号機は40年前の米国製なのであった。かねてからこの1号機に対して米国では水素爆発の危険性が指摘されていたと聞く。原発の過酷事故の重大性、すなわち国内的にも、対外的にも賠償を伴う事故であることに気づかされた。戦後、日本は侵略戦争加害国として賠償を要求する国に賠償金を様々な方法で支払ってきた。原資は国民の税金からであった。原発事故による被害国に賠償するのは当然だが、原資は国民の税金であろう。日本は8月15日直後の姿に立ち返ったことになる。国家は戦争を決断し国民を戦争に動員する。敗戦による賠償金は国民が支弁することになる。放射能被害は金銭で贖うことはできない。放射能をまき散らさない以外に被害を無くす方法はない。現実問題の解決として賠償がある。根本解決ではなく対症治療であるに過ぎないことではあるが。

私は、原発建設反対、操業停止運動は大いにやるべきであると考えていたが、理由は、反対運動が高まれば高まるほど、事故対策は強化され安全度は高まるからという妙な論理であった。ライバル同士が競い合えば合うほど、より安全となり、事故発生のチャンスが少なくなるからであると。これは原発反対運動者にとって利敵行為に写ったであろう。原発論争をゲームではないが、ゲーム感覚で見ているのである。

国産H1ロケット打ち上げに成功して日本中が

沸き立っているとき、私は原発反対運動家に、国産ロケット反対もしてくれと、原発反対集会で発言してしまった。その理由は、原爆を運搬する手段を日本は獲得したので、日本の原爆製造に拍車がかかるのではないかとの思いからであった。

話題を変えるが、強い体内被爆を受けて死亡した人の遺体には依然として放射性物質は残っているであろう。これをどのように処理しているのだろうか。遺骨をそのまま遺族に返しているのだろうか。高木仁三郎氏は反原発の有力な指導者であったが、ガンで亡くなられた。生前、チェルノブイリ原発地を再三訪問したとき。私の職場の筋向かいに国立ガンセンターがあり、その医師がガンで亡くなっておられる。ガンには放射線治療がつきものである。ガン患者の体からは放射能は出ないであろうが、長い間放射線治療を受けると、その放射線は体内組織中でどのような振る舞いをするのであろうか。放射線はガン組織だけでなくまわりの正常組織にもダメージを与える。体内被曝の放射性物質はガンを発生する可能性をもっている。放射線は、ガンを撲滅する役わりと、ガンを発生させる両面性をもっている。医師はガン患者を放射線で治療しようと、自らは放射線によってガンとなったのではないか。

### ●「死の灰」、「核の冬」、「複合汚染」——警告のコトバの系譜、「メルトダウン」もこれに加えたい

原発事故による重大影響に関しては全く無知であったが、原爆実験による「死の灰」の影響は恐怖であった。プルトニウム生産の危惧は日本の原爆作成の恐怖もその影響の恐怖であった。「核の冬、第3次世界大戦後の世界」というSF未来小説の著書は、カール・セーガンである。天体物理学で高名な科学評論家である。原爆戦争の結果、地球環境の激変を描いたもので、週刊誌・テレビなども相次いで特集した。原爆戦争後の地球は死の世界、人間をはじめ動植物が存在できない状態となるという物語である。この未来像に対して原爆実験大国の御用学者達はその未来像を「科学的」に否定していたことを思い起こす。「死の灰」、「核の冬」はその意味を正しく知らなければならない現代用語である。原発に関して手元にある『われらチェルノブイリの虜囚、ドキュメント・日本原発列島を抉る』と題する新書本を読み返して慄然とした。現に発生している原発事故と同じ状況がシミュレーション・ストーリーとして描き出されているのではないか。この書物を真剣に読まなかったので頭に残らなかったであろう。1987年刊行の三一新書である。

核の冬議論の以前に、例えば、殺虫剤DDTなど人為的な化学製品を大気の中や、人の皮膚などに散布する害は世界的なレベルで論議され、米国、日本などは使用禁止となるまで長年月を要している。有吉佐和子の小説『複合汚染』は新聞連載中から話題となり、単行本はベストセラーとなった。「複合汚

染」は新語として社会的認知を受けた。また、膨大な時間の経過で形成された原生林、熱帯林、山河、大地、海洋、さらに生活の場は「人が触れてはならない。触れることができないもの」という、一種の「タブー」として警告する内外の学者がいた。これらに手を加えると、これらの復讐を受けると言うのである。縄文人はこのタブーを厳守していたとされ、日本人は縄文人に還れと主張する哲学者がいる。

原子核連鎖反応に関してもそのまま言えることである。様々な元素はすべて恒星の内部で形成されたものである。恒星の内部は超高温・超高压でしかも膨大な時間をかけて、水素原子を材料としてヘリウムをはじめ順次作られていったものである。この恒星の寿命が尽きて大爆発し、その破片が宇宙空間にばらまかれ、宇宙のゴミとして浮遊する。この浮遊物が核を形成し、そのまわりに宇宙のゴミを集め新しい天体が形成される。そしてやはり大爆発をする。私達の体内の赤い血には鉄が含まれている。その由来の根源は地中に含まれている土壌からでも、動物の肉からのものではなく、遠く遙か昔の恒星の腹の中で製造されたものである。原子核連鎖反応に手を染めることは、膨大な時間をかけて原子核融合によって形成されたものに手を触れること、「タブー」に触れることではないか。高木仁三郎氏とドイツの神学者（名は失念）との対話で、神学者が「地球上に放射能の危険が亡くなってから、神は人間を住まわせた。原子力の解放は、再び地球上に放射能をまき散らし人が住めなくさせる愚を犯している」というような警告を発していた。核の冬と同じ結論である。「メルトダウン」が常識語として定着し、我々に警告を発し続けるようになって欲しい。

### ●地震予知

海上保安庁にはその末端組織として水路部航法測地課がある（現在は海上保安庁海洋情報部衛星測地室と組織替えしている）。私は長年ここで仕事をしていた。航法測地課は、天体暦、航海暦、衛星測地、衛星レーザー測距、離島観測、地磁気・海上重力観測などの仕事をしてきた。私の仕事は天体暦・航海暦の計算であった。東海地域の地震の予知の必要性から、省庁横断的な「地震予知連絡会」が、私の在職中に立ち上げられた。通称「予知連」と呼んでいた。航法測地課の所掌事項中の離島観測、地磁気・海上重力観測が「予知連」の仕事に関係していた。地震予知といっても、日本全域の地震予知ではなく、東海地域の予知である。この地域（陸地、海洋）の地殻の時間的な変動、地磁気、地電流の変動、海上重力の変動の常時監視であった。これらに変動に異常があれば、観測を強化し、いよいよとなれば関係省庁に地震の予告をして対策を迫るという仕組みであった。その後、東南海地域、南海地域が対象内に入れたが、三陸沖は無視され続けてきた。（地震学会などでは宮城県沖地震に関して再発の危険性

が指摘されていた。)北海道十勝沖も対象外であった。どうも東海地区のメガロポリスの地震被害防止対策であった。阪神・淡路大地震(1995年)以来「予知連」は頼りにならぬとされたのか、「地震調査研究推進本部」が別に発足している。前者は国土交通省の、後者は文部科学省の管轄下にある。ともかく同じ課であるから仕事内容は毎月定例の課務会で、年に2,3回「予知連」の話が出ていたように記憶している。それで「予知連」がしている仕事の概略は知っていた。なお、課務会の概要は、部会で報告され、そのまた概要が庁議に報告される。そしてその又概要が省議に報告されるか、割愛される。省議では末端が何をしているのか知らされていないのであろう。原子力安全委員会の仕事内容の概要が大臣レベルで把握されているか否か。おそらく似たような状況ではないか。

そのような関係から、私は地震には関心があった。ここ数年、宮城県沖、岩手県沖でかなり大きな地震が続発し、この辺が俄に「騒々しく」なっているなと私は感じていた。今年なって、岩手県沖を震源地として比較的大きな地震があり、三陸沖地震の再来かとマスコミなどが色めきたっていたところ、気象庁の担当官は、予想される震源区域から外れている、そこを震源とする地震は過去に起きてない、三陸沖の地震と言うにはマグニチュード不足であるなどというようなコメントを発表していた。私は、岩盤に新しい亀裂ができたのではないかと考えた。私の若い頃、プレートテクトニクス理論が言われ出した頃、それを疑問視する学者もいたし、断層がずれて地震が起きるのか、岩盤に亀裂が入り断層ができるときに地震となるか、が議論されていたように記憶している。

過去に地震がない点を震源とする地震は、新しい亀裂の発生として重大視すべきではないかと新聞記事を読んで感じた。先にあげた気象庁担当者のコメントを、「三陸沖地震はこんなものではないよ。大きな地震はこれから起こるよ」と解釈すると、巨大地震を薄々感じ暗に予測していたことになる。そうであれば政府機関の一員として警告を「地震予知連絡会」とか「地震調査研究推進本部」とかに「ご注進」すべきではなかったか。進言されても、東北地方での地震・津波はなにかあらんと無視・一蹴されたかもしれないが。

『新潮45』7月号に「原子力村」に加担した「地震予知村」の大罪と題する塩谷喜雄氏の文章が掲載されていた。この文章には私が恐れていた告発がなされていた。原子力村の住民は官・政・財・学にまたがるエスタブリッシュメントであるが、「地震予知村」の住民(官・学の村民)はやや政治的な権限が小さいようである。「予知連」は首都、東海地域のメガロポリスの地震予知に主力をそそぎ、原発がある地域の地震・津波対策は重点観測・監視外とされていた。予知できなかった地震のある

毎に、「貴重なデータと知見を得ることができ、地震予知に役に立てたい」との常套句を繰り返している。

### ●懸念が杞憂であることを願う

国によっては、大地震、大災害、大津波などで村落が潰滅し、残された人も放置されてしまうことがあると聞く。見捨ててしまい、復興というような選択肢などないようである。日本では復旧・復興以外の選択肢は考えられない。今回の天災・人災の複合による壊滅的な被害を受けた被害地は必ずや復興されねばならぬとの決意は日本人が一致して共有していると思う。

戦前、教育勅語で教育された私は、国難の時の生き方として教えられた「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」の言葉が頭をよぎった。国家の危機に際しては国民の命をかけて、天地とともに窮まりない天皇の国を守るのが国民の義務であるとの教えである。「滅私奉公」精神で日々を過ごさねばならないのである。人間の心を一つの閉じた空間にたとえれば、平和時には「私的空間」があり、諸々の欲望が詰まってもよいが、有事・国難時には「公的空間」で満たさねばならない。「公的空間」には、国家の命令を如何に忠実に実践するか「覚悟」が充満していなければならない。命令によって南海の孤島にゆき、激戦の末、敗れ取り残され孤立した兵隊は敗残兵と呼ばれ、敵も味方も放置する。敵にとっては脅威とはならない相手であるから無視され、味方にとっては戦力として使いものにならないから遺棄されるのである。アッツ島、サイパン島などは玉砕(全滅)に追い込まれてしまった。玉砕は「義勇公ニ奉シ」たことで賞賛に値する行為であった。特攻攻撃もこの「滅私奉公」精神の表れとして国家・国民がこぞって捨て身の心意気に感動したのである。

日本国家は移民という名の棄民政策を採用した歴史もある。日系ブラジル人、日系ハワイ人の先祖達はこの政策に従った人達である。傀儡国満州帝国を建て外地とし、そこへ大量の日本人を送り込んだ。敗戦時の外地から内地への引き揚げ時の悲劇の原因を国家が作ったのである。15歳前後の少年を満蒙開拓義勇兵とし満蒙の地に追いやり、各種少年軍学校で少年兵を養成し戦闘の前線に立たせた。戦時、「滅私奉公」は国民の義務であった。戦後「滅私奉公」精神は義務としてではないが、基本的人権を制限する「公共の福祉」として生きている。

現在、為政者のなかに、一時的にもせよ生産活動が不能となった被災者を「敗残兵」視する人はいないと信じる。この際しばらく泣いて貰おう、辛抱して貰おうという気持ちがあるとすれば、やがて被災者は没落し、負け組に組み込まれ下積み生活を強いられる。昔、武士の支配する時代になって、天皇に仕えていた大量の宮仕え人が流浪の民とな

り、やがて没落して賤民となる運命を辿ったと聞く。復興すなわち、もとの地位、生活に戻すという思想もなければ意図もなかった。

後期高齢者医療制度ができたのは、若い元気な国のために働いている現役の医療保険積み立金を高齢者が浪費しているとの不公平、不均衡を正す為にあるという。生産性を失い、国に何の役を果たさないで消費だけで暮らしている老人は、この際泣いて貰おうとの政策は国家による「姥棄て」である。姥棄て、棄民、敗残兵という精神文化が為政者の心のどこかに「遺産」として引き継がれているのではないか疑う。

人間と動物との決定的な違いは人間には文化とDNAとを継承し、動物はDNAだけを継承すると言われる。このテーゼを私は一応認めるが、この文化を継承し発展させるのが誰なのか。庶民を含めた社会全体の人間なのか、社会の上層部を占めるエリート達なのか。エリート達はどうも後者の見方をしているようである。国家あつての国民だとの国家主義、共同体優先の思想、「官尊民卑」思想である。国民の生殺与奪の権を権力者が握っているとの思想である。国家が文化の担い手であるとの考えは、支配階層の人間が文化を担って継承されるとの考え方に落ち着く。とすると人間一般の肉体の生命が大切なのではなく、エリート達の肉体の生命が大切なのである。何故ならその肉体が保持している文化が大切で、後世に伝えるべきものなのだからである。日本の歴史と伝統を守るということは、日本の文化を守ること、とりもなおさず文化を保持する（とされている）人間を大切にすることとされる。歴史書、歴史文学など偉人史である。これは私の「体験」からの結論で、体験が違ふと正反対の結論になるかも知れない。

ともかく、大地震・大津波・原発過酷事故による一人一人の生命と生活を本当に大切にするか否か、私の体験とそれから導き出された推論では、現在国家の為政者は国の「科学技術文化＝原発」とか「国策」を優先に政策を推進しているのではないかと考えてしまう。今問題になっている原子力発電という技術文化は保持すべきものと為政者は考えているのではないか。現在、地中深くの岩盤に原発を建設するとの原発推進政治家の集団が生まれている。岩盤には地震・津波の影響を受けないからというもの。原発は巨大なプラントであるにもかかわらず、それを動かすシステムは地震・津波の影響がなければ事故が起きないと考えているようである。戦時中、長野県松代の地下壕に大本営を建設し、天皇もそこに避難してもらおうという計画が実行されたが、完成前に敗戦となった。何かこれと似た発想ではないか。「岩盤にかじりついても『原発様』を守る」ということなのである。

国家為政者は、人はやがて死ぬ、戦死者もその家族も、地震・津波・原発事故にあった人もやがて死

ぬ（為政者自身も死ぬ）。やがてはすべて忘却の闇に消えてゆく。抗議・怨嗟の声も聞こえなくなる。国家にとって大切なものは、人間の命の期間よりもっとスケールの長い目で存続すべきものを保持・継承してゆくべき義務があると考えているようである。国家にとって大切なものは「日本文化」であり「国策」なのである。

私の懸念は、大地震・大津波・原発過酷事故の被害者の一部が、今後取られている政策によっては、没落してゆくのではないかとこの予感がするのである。それが杞憂であり、予感が誤りであることを願うものである。

### ●海上保安庁の伝統？ 「正義・仁愛」

海上保安庁は戦後生まれた官庁である。マッカーサーの肝いりで創られたという。警察予備隊、保安隊、自衛隊の流れとはまた違う。海上保安庁のモットーは「正義・仁愛」である。そして戦前からある「燈台部」と「水路部」に新しく「警備救難部」を加えて「三位一体」と初代長官がぶちあげた。警備救難部の職員は旧海軍の人が多く占めていた。この海上保安庁には、特筆すべき「伝統」がある。以下3例を挙げる。

(1) 朝鮮戦争時、海上保安官が掃海艇に乗せられ日本近海の浮遊機雷の排除の任に当てられ、一人が爆死した。掃海艇の能勢隊長は「俺たちは公務員であつて軍人ではない。だから戦争に参加すべきでない」として掃海任務を拒否した。

(2) 四日市の臨海コンビナート群から海に吐き出された有害物質で海が汚染されていると、その危険性を内部告発した田尻保安部長は、「死の海」四日市港から綺麗な海に面する田辺保安部に転勤させられた。後に美濃部東京都知事に拾われ出世した。

(3) 中国漁船が海上保安庁の巡視船に衝突する映像をユーチューブに流した、巡視艇の一色海上保安官は

「国のため国民のために、実行した」と記者団に答えている。

最後の人の行為は多少問題があるにしても、「正義・仁愛」が着実に部内に浸透しているように思う。石原東京都知事は一色海上保安官を高く評価したと新聞紙が報じた。よくある「歴史の皮肉」である。

なお海上保安庁警備救難部の仕事は、領海の警備、海難救助が主要任務である。一般の船舶が港に待避するような怒濤の海で遭難した船舶の海難救助に向かう。しかも救援対象の船の国籍を問わない。また一般の航空機が天候不良で飛行中止となった気象状況下でも飛行機、ヘリコプターを飛ばして救難に当たっている。この世の中で、「正義・仁愛」の海上保安庁精神を持つ人が大勢いれば、社会はもっと「透明」になるのではないか。原発の作業現場から多くの告発があつたが、私達はその叫び声に耳を塞いでいた。「正義・仁愛」の士はいたのであるし、

今もいる。

### ●1945年8月15日前後の世の中の急変と2011年3月11日前後の急変とは似ている

戦時中「神州不滅」、「一億一心」、「欲しがりません。勝つまでは」、「贅沢は敵だ」、「石油一滴、血の一滴」、「壁に耳あり、障子に目あり」（反戦・厭戦言論の相互監視）などというスローガンがあった。戦後すぐそれは「一億総懺悔」というスローガンに急変した。戦時は軍国歌謡「出せ一億の底力」が力強く歌われて、戦後は「赤いリングに唇寄せて」の流行歌が巷に鳴り響いていた。占領軍に日の丸を禁止された国民は「リングは何も言わないけれど、リングの気持ちは良くわかる」と、心中は日の丸の旗を恋しかったのかもしれない。現在、「日本一心」、「出せ日本の底力」、「がんばれニッポン」などが叫ばれている。戦後すぐに発行された三つ折り16ページの小冊子シリーズの一つに宮沢賢治の「雨にも負けず」があり、広く流布され読まれた。解説者は谷川徹三であったと記憶している。最近また「雨にも負けず」が新聞、インターネットなどに流されている。この短い詩は、争いことがあれば「ツマラナイカラ止口」といい、病気の子もあれば「行ッテ看病シ」、疲れた母の「稲ノ束ヲ負イ」、死にそうなのがあれば、「コワガラナクテヨイ」いい、食べ物は一日「玄米四合ト味噌、野菜」、住まいは「萱葺キ小屋」でよいという内容である。

戦後、大人達は、自分は元々民主主義者であったと告白し、軍の悪口を一斉に言いまくっていた。3月11日以降は、新聞、週刊誌、テレビ、評論家たちは、一斉に「原子力村」の悪口を言い始めた。原発安全PRに登場した評論家がリストアップされ糾弾されている。軍も東電も糾弾されて然るべきであろうが、それ以前の「沈黙」は何であったのだろうか。どうしてこのように不可思議な歴史が繰り返されるのであろうか。

現在、戦地での交戦体験者は少なくなってきた。銃後の守りに関した戦時体験者も少なくなりつつある、

勤労働員時代、疎開時代、教科書墨塗り時代などに青少年期を過ごした世代の人も、75歳の後期高齢者の仲間となっている。戦争被害を嘆き、平和を強く願う後期高齢者は、世の片隅に追いやられ忘れ去られている。地震・津波・原発事故の被害者のこれからの運命と自分達が辿った運命とをつい重ね合わせてしまい、鬱の状態になる。若者は「頑張れニッポン」と操の状態で明るい。

目下国の借金900兆円、それに復興資金、原発被害賠償金に加わっている。これをどのように返済し調達するのか。戦後、超インフレ（スーパー・インフレ）を体験した者として、日本経済の成り行きも心配である。

### ●国難時代、小国でよい、小国しかない、デンマークという国

3月11日以来、日本は国難の時代となった。大地震、大津波、原発過酷事故は、明治以来走り続けた一等国への夢を奪われたことになった。私は夢が破られてしまったとの悲観ではなく、見てはならぬ夢が果たされなかったとの気持ちである。誇大妄想的な国の夢をみるべきではなかった。一等国であり続けるためには、国際競争に勝たねばならない、そのためには「派遣切り」し、「正社員と準社員」とにわけ、勝ち組負け組で仕訳するというような人間を道具、役立つ道具、役立たない道具とする仕訳のあり方に異議がある。内村鑑三の『デンマークという国』には、英国のような世界に冠たる覇権国を目指すのではなく、デンマーク（デンマーク）のような国を日本は目指せと説いている。インターネットの電子文庫に現代語訳が出ていた。以下はその抜き書きである。明治40年台の著述で、日露戦争の戦勝気分がまだ抜けきれない時代の著述であることに注目したい。

今日、ここでみなさんにお話ししましたデンマークの話は、私たちに何を教えてくれるのでしょうか。

第一に戦いに敗れることは必ずしも不幸ではないことを教えてくれます。国は戦争に敗れても亡びません。実際のところ戦争に勝利したのに滅びてしまった国は歴史の上で決して少なくはないのです。国が栄えるか、亡びていくかは戦争の勝敗の結果によりません。その国民の普段からの心のありようにあります。

第二は自然の無限な生産力を示します。富の源は大陸にも、島々にも、沃野にも、砂漠にもあります。大陸の所有者が必ずしも富んでいる者ではありません。小さな島を持っている者が必ずしも貧しい者ではありません。ですから小さな国は決して嘆く必要はありません。逆に国が大きいことによって誇るということはできません。富というものは形として現れたエネルギーです。そうしてエネルギーは太陽の光線にもあり、海の波にも、吹く風にもあり、噴火する火山にもあります。もしこれを利用することができずならば、それらはみなすべて富の源です。かならずしもイギリスのように、世界の陸地面積の六分の一の所有者となる必要はありません。デンマークで足ります。いや、それよりも小さな国で足ります。外に拡大するよりは内を開発するべきです。

デンマークは現在、自然エネルギー先進国となっている。2010年の国民一人当たりのGDP（国内総生産）は世界第6位である。日本は第16位である。富国強兵・殖産興業の国権か、自由平等・平和の民権かの対立は、ややこじつけのアナロジーとなるが、大量消費・大量生産を持続させる危険と隣あわせの

原発推進か、貧しくとも足ることに甘んじ安全な脱原発かの対立に引き継がれている。私は躊躇せず後者を選ぶ。地震国、火山国、台風・津波国で国土は狭く、資源は乏しく、山岳地帯が大きく占め、平野は肥沃であるが狭い。河川は氾濫を繰り返す。とても大国を志すべき国ではないと考える。

### ●単純なモデル計算

今回の災害で職を失い、家を失い、蓄えが僅少な人がどの程度いるのか見当が付かない。5月末、いまだに避難所暮らしをしている人の数は10万人余である。それで当面10万人が支援を受けなければ生活できないとする。この人達が最低限度の生活を続けるために必要なお金の総額はどの位になるのか、非常に大雑把な計算をして見た。その必要な金額を、仮に生産人口の人々が拠出するとなると一人どれ位になるかをイメージするためである。津波が襲いかかる場面を見て、まず第一に命が助かるようにと願い、避難者の群れを見て、これからどうして生きてゆくのか、その支援をしなければ思う。支援には心の支えと金銭的な支えの二つが必要である。

厚生労働省が試算し発表しているデータによると、一人が最低限度の生活をするために必要な月額額は、年齢によって異なるが、それを加重平均すると、39,860円である。年額は478,320円となる。

現在日本の生産年齢の人口は81,493,000人である。10万人の1年間の最低限度の生活費は4783200000円すなわち478億3200万円である。この金額を生産年齢人口数で割り算すると、586.94円となる。すなわち一人当たり年間587円弱となる。これを10年前後の間拠出することになる。すでに国民の間で募金活動が活発で、その募金額だけでも、避難者の生活を維持するだけのための金額以上が集まりつつある。募金は避難民だけでなく被災者への募金も含まれているが。

ともかく避難者の生活資金は年総額にすると約478億円とはじき出した。これは当座の生き残りのための金額である。「健康で文化的な最低限度」の生活とはどういう状態なのか意見が分かれるところであろうが。

日本の国家の一般会計予算は80兆円前後であるから、最低生活保障額は国家予算の約0.06%程度となる。

「復興」となると、大変な金額が必要となる。予算の半分が税金であるとすると、法人・個人の年間所得が概算できる。ただし税率体系が複雑を極めているから年間所得額はつかめない。古い統計資料であるが、1990年に年額にして国富は330兆円、家計は232兆円増えている。別の古い資料の1985年の国民総支出は304兆円である。被災者が被災地に留まるかぎり、社会生活の場が整備されていなければならない。そのために社会基盤整備（インフ

ラ）、公共施設、教育施設、商店街、演芸、体育施設などがなければならない。その費用は国家や国民の経済力とどのような関係になるかを調べなければならない。政府の試算によると社会整備（道路、建物）の再建には16兆円から25兆円に費用がかかると言われている。国富と家計の合計の年間増加額と比べると2.8%から4.4%の額である。再建費は再建されればその後の支出はないから、費用捻出は毎年することはない。社会基盤と道路との再建は以上の通りであるが、それでは復興とは言えない。再建の場で住民の生産活動がなされるようになって復興したと言えるのではないか。

被災者が職に就くためには職場も必要となる。この段階となると生活支援の額も減少してくる。会社設立となると、当初は公的資金からの融資となるが、いずれは私的な企業家の手によらねばならない。そのためには、通常は資金集めをしなければならない。有限会社というのもあるが、大抵は株式会社の形態をとる。さきに違和感があると批判的に書いた「株式」の発行、株式会社の設立も必要となる。株購入者は配当金を要求できる。インフラ整備資金は国公債の発行、銀行や個人からの利子つき借金に依存する。インフラ整備に要した資金の回収は法人税とか固定資産税、ガス・水道・電気料などで回収する。企業の売り上げ金は、運転資金、職員賃金、設備投資、株主配当、会社純益、役員の手分け、法人税などに分割されるのであろう。この辺の金の流れは複雑を極め、どのようなシステムの網の目のなかを、どの位のスピードで流れていくのか皆目見当がつかない。

またさらに、被災者の住宅の確保がある。土地と建設資金が必要となる。ローンを組んでその確保に努めなければならない。政府が家を建設しそれを500万円で売却するというようなニュースも流れている。

これらに加え、がれき処分、放射能被害補償、液状化対策、耐震装置点検強化などの経費がプラスされねばならない。

### ●1999年度及び1990年の国家・国民の経済力データ

今回の災害がなければ考えることをしなかった国民の経済力を調べてみた。国家全体としてどの程度のダメージを受けたか。それを補う為にはどの程度の経済力がなければならないかを調べてみた。古いデータであるが考える資料としてイメージするためには十分であると思う。

・データ その1 1999年度  
 流通現金 60兆円、 個人家計の保有現金 35兆円、 動員可能個人資金 1022兆円  
 保険・年金準備金 384兆円、 預金 713兆円、 株式・債券・その他 278兆円  
 個人家計の負債総額 388兆円、 総世帯数 4

500万戸の預金総額 423兆円  
 ・データ その2 1990年時点までの蓄積額  
 国富（正味資産） 3491兆4500億円 家計  
 2395兆6500億円

国富も家計も国民の勤労の実であって、積年の累計である。これに毎年の国民総生産高が加算されてゆく。

### ●東日本大震災の被害総額

東日本大震災の地震・津波だけの被害額は、建物や道路で16兆円から25兆円であると政府が試算している。

阪神・淡路大震災の同被害額は約10兆円であったという。

原子力発電所の事故被害額の試算は百兆円程度だと言うが、放射能汚染地域が半径20キロ圏内であれば、約50兆円、半径30キロ圏内であれば約110兆円と試算されている。

2008年度の日本の国有資産は664兆円と政府は報告している。年度は違うが国民の動員可能個人資金は1022兆円で、国民の総資産の方が国家資産より多い。地震・津波・原発事故被害額が135兆円は、国家と国民が折半して10年前後の年賦で賄うことになるのであろうか。

### ●結語

1945年に大日本帝国が崩壊し、それに連動し傀儡満州帝国も消滅した。満州帝国に在住して内地に引き揚げる日本人に向かい—中国人は「貴国のような政治家を持つ国民はお気の毒ですね」と言ったそうである。言われた日本人は、植民地支配の恨み辛みを言うのでなく内地引き揚げの労苦をいたわってくれたと感謝していた。私は、穿ちすぎかも知れないが、中国人の国家観がその発言の裏側にあるように受け取れた。「海ヨク船ヲ浮カベ、海ヨク船ヲ覆ス。海ハ民ナリ、船ハ国ナリ」との国家観である。民を害し苦しめる国家は国家の名に値しないから取り替えれば良いではないかと、その中国人は言いたかったのではないか。明治維新以来、日本国の対外膨張政策によって、韓国人、中国人は勿論、日本国民までも塗炭の苦しみを味合わせた日本人政治家の続出を、日本国民は何故制裁してこなかったのであろうかと言いたかったのではないか。易姓革命を政治的伝統とする国ならそのように考えるであろう。

万世一系の天皇を担いできた政治家は、中国人の国家観を徹底的に排除してきた。日本国民の方も「寄らば大樹の蔭」、「長いものには巻かれよ」、「事大主義」の処世術が染みついている。日本は「海ヨク船ヲ浮カベ」続けてきたのである。国民の中から選ばれて政治の中核に上り詰めて支配層の一員となると、国民の生命と暮らしを奪い・圧迫することが政治の要諦であるかのように振る舞う。これを近

代日本の政治サイクルとでも呼ぼう。

私は、3月11日以降の日本の歩みが、8月15日以降の日本の歩みに酷似しているという事実を指摘した。それは単に歴史は繰り返すと言いたかったわけではない。

3月11日以降の日本の課題は、日本的政治サイクルをどこかで断ち切って新しいサイクルを創設することである。「海ヨク船ヲ覆ス」も採り入れた政治サイクルである。それでこそ私は「三時代を生きる」ことになる。サイクルを断ち切らねば3月11日は8月15日の単なる延長にすぎず、「二時代」を漫然と生き延びることになる。私の体験記からそれを読み取って頂ければ幸いである。

### 編集後記

東日本大震災を経験した誰もが、見たこと、知ったこと、思いを伝える場として報告集を発行しました。第一集をお読みいただいた井上先生から思いの詰まった原稿をいただき第二号に繋がりました。

今回の震災は我が国にも、生活している全ての人々にとっても人生で最大の出来事です。皆さまの「見たこと、知ったこと、思い」をお寄せいただくと幸いです。

外崎 記